

HITOTSUBATAGO NO. 6

# ヒトツバタゴ



対馬生物研究会

January 1989

## 絶滅の危機せまるツシマヤマネコ

浦田明夫

この報文は、産経新聞「いきもの紀行」として10回（昭和63年5月30日～6月10日）にわたり連載されたものに若干加筆したものである。

### ■ヤマネコのいる島

長崎県対馬は九州本土まで 147km、朝鮮半島までわずかに53km、まさに国境の島である。古くから大陸と日本との交通上の要地であり、また美しい自然と歴史の島でもある。

生物についても大陸系、日本系、対馬固有のものが混生している。大形哺乳類のツシマジカは対馬固有の動物で、中形のツシマテンは日本系のものである。しかし対馬を代表する動物といえば大陸系のツシマヤマネコが筆頭であろう。西表島にイリオモテヤマネコが発見されるまでは、ツシマヤマネコは日本に生息する唯一のヤマネコであった。

ツシマヤマネコは東南アジアを中心に生息しているベンガルヤマネコの亜種で、この仲間はビルマ、マレー半島、スマトラ、ジャワ、ボルネオ、フィリピン諸島の一部に普通に見られるヤマネコで、その分布は更に、中国、台湾、朝鮮、シベリア東南部、チベット、インド北部まで広がっている。このベンガルヤマネコがいつ頃、どのような経路をたどって対馬に渡来したかは未だ多くの謎につつまれている。

しかし、対馬にヤマネコが生息していることは人々には古くから知られて

いたことである。これが動物分布や分類学上世間に広く知られるようになったのは、明治の終わり頃である。英国の大英博物館に依頼されたアメリカ人 H. P. アンダーソンが明治35年から数年間日本中を採集旅行して歩き、ネズミ類を中心に動物の採集を行い、それを英国に送ったのである。もちろん対馬でも採集を行った。その中にツシマヤマネコが含まれていた。その後、注目をあびることもなかったツシマヤマネコに、筆者が強く興味をひかれたのは「もう対馬にヤマネコはいないのでは」と言われはじめた昭和30年代の終わりである。しかしその頃、対馬のだれ一人としてツシマヤマネコについて情報を提供できる人はいなかった。

#### ■生きたツシマヤマネコを見る

昭和41年8月11日、筆者は対馬高校生とともに対馬の北部上県町志多留でキャンプしていた。朝早く、一人の生徒が私のテントにやってくる。「ツシマヤマネコがトラップにかかっている」と叫ぶ。大きく動悸する胸をおさえて現場へ走って行く。数日前から沢沿いに仕掛けていたトラバサミにかかっていた。未だ幼獣で生後3・4か月と思われたが、猛獣を思わせる精悍な顔つき、近づくと低い声で「ウッ！」とけん制する。これが野生での初めてのツシマヤマネコとの対面であった。これはいろいろな事情から、大阪の天王寺動物園に引きとられ、日本で初めて多くの人の目にふれることになった。しかし残念なことに寄生虫におかされていたらしく、約半年後死亡した。筆者のところにはその死亡通知が送られてきた。同じ頃、対馬北部で野犬に襲われた幼獣2頭が捕獲された。生後3・4か月の雌猫で、生態研究をするという事で長崎大学が飼育することになった。

そして昭和43年1月2日、対馬南部（久和）で養鶏場のニワトリを襲う動

物を捕獲するために仕掛けたトラップに大形の雄がかかった。筆者のもとに届けられたので測定したところ、体長60cm、尾長25cm、体重 4.8kgの堂々たる体格。今度は地元におきたいという県および対馬町村会のすすめで筆者が飼育を引き受けることになり、いよいよ本格的な生態研究がスタートすることになったのである。

一般にツシマヤマネコは、外観上、イエネコとほとんど区別できにくいが体は成獣ではイエネコより一回りから二回りほど大きく毛色は暗褐色のトラ毛であり、顔には2本の白線が走っており、耳は顔に比べると小さく、そして先端がとがらずにまるくなっている。また、耳の背面には必ず淡黄色の斑紋がみられる。この点がイエネコとの最も区別しやすい点である。また、眼はイエネコでは明るい所でその瞳は針状にまでなるが、ツシマヤマネコは針状にはならない。イエネコは普通「ニャーン」というが、ツシマヤマネコは筆者が飼育した延べ6頭、6年間では「ニャーン」という鳴き声を聞いたことはない。

#### ■ツシマヤマネコを飼育する。

捕獲された雄を筆者のところで飼育しはじめて2年近く過ぎた昭和44年10月4日、山中でけがしていた雄が見つかったがどうしようかと豊玉町卯麦から連絡を受けたので、早速長崎県文化課と相談したところ、筆者のもとで治療と保護をするよう指示を受けた。最初の雄よりやや小さいが、色彩の明るい個体であった。これまでのツシマヤマネコ1頭、ツシマテン2頭の飼育に加えて、もう1頭ツシマヤマネコを飼育することになり、いよいよもって飼育代はピンチになってきた。当時、飼育代としての2百円の出費はいたかった。すでに県指定の天然記念物には指定されたものの、長崎県等からの経済

